

## 随 想

〰〰〰〰〰〰〰

## 山のぼりと研究

二 木 久 夫\*

この冬は異常な気象条件だつたためか、例年になく山岳遭難が多かつた。

最近、山の中腹のいたるところにロープウェイやリフトがつけられ、都心を前夜発てば翌朝には2000mを越す雪の山までいつきに登れるようになった。この観光開発と登山用具の進歩が登山技術を低下させ、遭難事故を誘引しているのではないか、と思われるふしもあり、我々の研究開発のやり方に想いを巡らせて、ひとごとではないような気がしてならない。

指導標はない、道もない、たとえあつたとしても、けもの道か、かすかな踏みあとの程度。ルートを探し、時には猛烈な藪をくぐり抜け、滝や岩場にぶつかつて、難行苦行を重ねながら登つて行くのが本当の山登り。道はついている、指導標、食事つき山小屋完備というのは、いくら高い山でもスポーツであり、ハイキングだと私は思っている。冬山でない限り、体力と時間とお金さえあれば必ず登れるのだから。

ここ数十年、私のぞつこん惚れこんでいる山域に西上州がある。西上州と言つてもさらに限られた群馬県南西端、下仁田・南牧・中里・上野の四つの町村にまたがる狭い山域であるが、そこには1000~1500mの標高を持つ100座を越すピークがある。富士山なら一山で占めてしまうこの狭い山域に、それ程多くのピークがあるということは、大半が切り立つた岩峰だ、ということである。

ところが面白いことに、ごく一部のピークを除いて、ほとんどすべてが三方は切り立つているが、一方だけが裏側の尾根に続いていて、ある種の執念と藪こぎ覚悟なら必ず登れる。もし切り立つた側から登るには高度の登攀技術が必要だが、そこにはスリルと展望に恵まれた未踏のすばらしいルートが残されており、今では得難いものとなつた不老長寿の山の幸、岩茸の収穫のおまけも期待できる。

西上州の岩峰には指導標はほとんどなく、しつかりした山道もついていない。踏みあとが現れたかと思うと、またいつの間にか消え失せてしまう。猛烈な藪をくぐりぬけたと思うと目の前に岩壁が立ちふさがる。徹底的な事前調査、登攀技術とルートファインディング技術が必要である。最近同行するようになった仲間の一人は「山登りじゃない、探検だ」などと言つていた。

研究開発も山登りと同じであろう。先例のある、指導標のととのつている、またはロープウェイのついている研究開発は、本当の意味の研究開発とは言えないだろう。すべてがインスタント、便利になつてしまつたプラモデル的な今日、徹底的に文献調査、関連技術の調査を行い、藪や岩場を踏破できる研究者が少なくなつて来たような気がする。とうてい不可能なルートに、技術も装備も時間も不十分なまま挑戦してみたり、ちよつとした滝や岩場に恐れをなして引き返していること、またそうさせることが意外に多いのではないだろうか。

私の仕事は社外の方々とも関係が深いが、自分の技術不足、勉強不足を棚に上げて、装備が足りないから登れないという研究者、カッコをつけるために最新鋭の装備を持ちたがり、見せびらかす研究者も多くなつて来た。もし装備にあかせて山に登つていいのなら、ヒマラヤの高峰に挑戦するには航空機をフルに利用する方がはるかに楽だし、北極圏、グリーンランド単独縦走の植村直巳の行動は馬鹿気たもの、ということになる。

最低の装備でも立派に登れる山男に新鋭の装備を与えたら、さらに困難なルートをつつと開拓するだろう。そのような新ルート開拓こそが真の意味の登山であり、研究開発なのではないだろうか。ラボオートメーションを進める一方で、実験技術の訓練もおこたつてはならない。体力、技術相応以上の重装備は、かえつて体力を消耗させ、遭難の原因になることさえある。真の岳人は実におそまつな、控え目の格好をしているものだ。列車の中で岩登りの道具をガチャガチャ言わせてみたり、ピッケルの銘を見せびらかすなど、岳人の中では最低とされている。雨の中で焚火がつくれるようにならなければ、一人前の岳人とは言えない。焚火一つが生死の分かれ目になることもあるのだ。

未踏の山を開拓していると、自然に仲間が集まるようになつて、山の情報も集まつて来る。研究開発でも、あの研究所にはすばらしい設備があるという評判よりも、何々の研究開発に関しては押しも押されもせぬ理論屋、実験屋が居る、と言われるようになりたい。座つていだけで世界中から関連技術の情報が集まつて来るようになつたら、しめたものである。

近年の化学せんいその他材料面の進歩に伴つて、登山装備も格段に軽くなり、便利になつた。お米を15kg背負い、着ごぎをかぶつて野営を重ねながら奥秩父の山々

\* (株)日立製作所家電研究所 工博

のルートを開拓した田部重治の記録を読むと、隔世の感がある。しかしながら、いつころに遭難事故は減つておらず、新ルート開拓もそれ程には進展していない。

交通機関、山小屋が整備され、登山装備が改良された反面、登山技術はむしろ低下して来て、トータルとしては昔とさほど変わっていないのではないだろうか。ポータブルラジオ、トランシーバを持つていながら天候の予測、天候の急変に対する適切な処置ができず、みすみす犬死する者の多いのはどうしてだろう。一昔前には、まずアプローチで未熟者はふるい落されてしまつたから、遭難にまで至らなかつたのである。

未踏の山域に入るためには、まず手に入る情報はすべて集める努力をしなければならない。2・3日の山行に対して、場合によつては半年も前から地元の役場や村人に問い合わせるなどして情報を集め出す。登山口の沢や尾根がわかるだけで、もう半分以上成功である。

以前、裏表が逆になつていた蔵王の山の写真で、散々混乱させられた苦い経験もあるが、もしその山域の写真があつたら、虫めがね片手に徹底的にルートを探つてみる。研究開発で言えば文献調査であり、経験者からの情報収集である。

ところが、村人は同行してもらえば、記憶をたどつて先導してくれるが、地図は書けないし、地図にルートを記入してくれと言つても、わからないと言う。もちろんのこと登山ルートを記録に残しておくこともなく、山林の土地台帳はいつたいどうなつていようのだから、と思ふことすらある。当然のことながら、未踏の岩場ルートなど皆目わからない。我々の研究開発で言えば、成果を設計図面や研究報告としてまとめる訓練をしていない。地元ではその必要がないのであつて、職人またはオペレータと研究開発者のちがいはこのへんに現れてくる。

山で記録をとらうと思つたら、たえず沢や尾根、地形、展望などの様子、場合によつては鳥や虫、植物の生態を細かく、その都度メモにとつておかなければならない。1時間も歩いてからまとめて記録しようと思つても、さて沢を渡つたのが先だつたか、炭焼き釜が先だつたのか、今さつき通りぬけたのは杉林だつたのか檜林だつたか、何時頃通過したのか、記憶が混乱してしまつていよう。そして現在地を確認する目的で、簡単な三角測量の技術も必要である。

はじめての山でパノラマが目に入つたら、時間の許す限りスケッチしておくのがよい。写真を撮るよりもずつと強烈に周囲の山々の姿が頭に残り、将来それらの山を

訪れる時のルートやむずかしさも、おのずから見当づいて来る。スケッチの時間は決して無駄にはならない。

その意味で我々の研究のやり方を見てみると、データは自動測定器からポンポン打ち出され、自動的に作図してくれる。データはたまるばかりで、ただそれを眺めているだけ、直感で結論づけていることも多いようだ。そのデータを骨までしゃぶつて新理論を導いたり、新技術として身につける努力をしなくなつて来た。しなくなつたと言うより、できなくなつた、できなくさせてしまつたと言う方が正しいのかも知れない。データというものは、山と積まれるともう料理しようという気になれなくなるもの、自分に都合のいいものしか使わなくなつてしまふものだ。ユニークな実験手段とか理論の新しい展開というものは、電車の中でもトイレの中でも、考えて考えて考えぬいて生まれてくるもの、まとめ上げた時には頭の中がクタクタになつていようものではないだろうか。

山登りもガムシャラに回数を重ね、踏破した距離や早さを競うだけが能ではない。人知れず咲いている花、小鳥のさえずり、美しい形の岩、山村の人々のほのぼのとした人情、時にはころがつている石ころがそれこそすばらしい掘り出し物だつたりして、車で通りすぎたのでは気のつかぬ楽しみがいたるところに埋もれている。つまらない山だろう、と思つて登つた尾根や頂が、整つた美しい雑木林やつつじの咲き乱れる別天地だつたりして、歓声をあげることもある。研究論文にしても、ただガムシャラに結論を急いだものは、何となく物足りないものだ。

埼玉県に近い、叶山というやがてセメントにされてしまふ石灰岩の岩山は、一般のハイキングコースを歩くとつまらない山だが、横から、裏側から取りつくと岩また岩でまことに手強く、変化に富んでいる。人とつき合う時も研究開発を進める時も、一面からだけ見ていたり、攻めてはならないと、この山に登るたびに考えさせられる。

ある山域を自由に歩きまわれるようになるには10年の歳月が必要だ。山勘というのは当てずっぽの勘のこととされているようだが、実際にははじめてのコースでも無意識にルートを見つける、長年の経験を基にした勘のことである。ただ、この勘は土地勘と同じく、別の山域では役に立たないことが多い。時間のかかる材料関係の仕事では、特に失敗の経験者の山勘を大切にしなければならないようだ。沢は下流がおだやかなら、上流では険悪になるものである。